

## いまだ帰れず 日本人墓地守る 阿彦哲郎さん

前項で紹介した伊藤實さんと仲良しで、いまだにカザフスタン北部寒冷地のカラガンダに住み、日本人墓地を守って、厚生労働省の遺骨収集などがあれば協力しているのが阿彦哲郎さん（七十九歳）である。伊藤實さんとは一九九〇年代初めにテレビ局の取材が縁で対面して名乗り合い、二人で日本人の墓地の調査や同胞捜しを行った間柄である。

二〇〇六年九月に、当時新しくカザフスタンの首都になったアスタナの空港建設に加わっていたPCI（パシフィックコンサルティング）の下藤雄之所長から協会に連絡文が入った。それには、哲郎さんや大使館員と一緒に、軍管理下にあつて立入禁止区域になっていたスパスク国際捕虜収容所（障害3〜4級用）の跡地に初めて立ち入ることができたこと、かつてここに入れられていた哲郎さんも感無量で、興奮して早口のロシア語で説明するのを、司令官が真剣に聴き入っていたのが印象的だったと、跡地の詳細を含めて知らせてきたものである。

ゲートを入って三メートル幅ほどの逃亡防止堀、収容長屋の廃屋、崩壊した食堂跡、赤錆びた廃棄ダクト。収容所から「国際墓地」までは窪地の堀をはさんで約一・五キロある。障害者にとつてはとてつもない急坂を昇り降りして死者を埋葬しなければならぬ毎日。寒さと空腹、誰も助けに来ることもない収容所の周りは、今も一面の草原が残るのみ。

下藤氏は最後に「これを映画に残して、戦争犯罪を形骸化する路線に追随する日本の若者に見せたい。こういう中にいた日本人がまだ生き延びているのだ」と結んでいる。

哲郎さんの父母及び本人の本籍は山形県酒田市。漁業を営む阿彦家の三男として一九三〇年（昭和五年）十一月に樺太本斗（ほんとう）町で出生。本斗小学校高等科を卒業後、町内の渡辺鉄工所で働きながら本斗青年学校に通い、青年学校では級長だったという。その責任感から、家族が引揚げるときに、母が「哲郎も黙って船に乗ってしまいなさい」と勧めても、一緒に船に乗らなかつたことを弟さんたちは後々まで悔やんでいたものである。ソ連側の監視が厳しい中でそれが出来たかどうかは別として、彼は父と残り、母と姉弟五人は日本の土を踏むことができた。

敗戦時は樺太庁の指示で、婦女子の引揚げを優先するため数え年十五歳以上の男子は残れということになり、また住民はみな義勇隊に組織されていたので、本斗の青年学校も「303部隊」の名称でわか兵隊になって活動していた。

青年学校というのは、戦時中全国の市町村に設置されており、小学校、高等小学校卒業後の勤労青年に実務教育、軍事教練を行い、在郷軍人が指揮をとっていたものである。

哲郎さんが働いていた鉄工所は戦後ソ連に接収されて造船所になったので、彼はそこで船舶修理の仕事に従事することになった。

一九四八年六月、突然ソ連警察に逮捕され、豊原の刑務所に入れられた。本人には何のことや

らわからない。けれども刑務所に六カ月留置された後に「ソ連刑法58条、ヴレジイチェリ容疑」で十年の判決を受ける。反ソ連扇動者という意味のようだ。当時はダモイ（帰国）したい人間がソ連当局の歓心を買って取り入ろうと、誰々は軍人だったとか、反ソ連のスパイだなどと密告する例が多かった。

彼も前記の「303部隊の責任者」という口実で犠牲になったことは間違いないようである。それにしても、戦後三年近く経ってからのことであった。ちょうどこの頃、吉原俊雄さん（シベリア・カンスクで死去）も、青年学校の武器であった竹槍その他を埋めて隠していたと密告されて、豊原で逮捕されている。

当時サハリンでは、故・矢口正さん（八十五歳で豊原で死去、茨城県八郷町出身）のように、同胞を売る密告者を憎み、殴り殺して十五年の刑を受けた人もいた。



哲郎さんは、最初の一年間は豊原刑務所で、真つ暗な中で食事もろくに与えられなかった。「睡眠妨害、絶食」という拷問があったことはよく知られた事実である。この間、誰が書いたのか、壁に刻まれていた「父母妻子兄弟姉妹健在にて我の拘留の有様を知らず」という文字を見続けたという。

その後は大陸に連行され、ウラジオストク、ハバロフスク等の収容所を転々と回され炭鉱で労働。最後ははるばるカザフスタンまで送られて、ジスガスガン鉱山で鉱石採掘をやらされたので

ある。

苛酷な労働のために約三年間で、健康体（1級）だった身体は骨と皮ばかりになった。彼は筆者に当時のことを「骨になったのです。肉はなかったのです」と説明する。日本語の「痩せた」という言葉を探しあぐね、しばらく出した表現であった。

体格が4級に落とされて、一九五一年には障害者の集められるカラガンダのスパスク収容所に移された。ここには病気や、手足が無く、死ぬのを待つような人ばかりが入れられていた。雪が降る前には連日交替で埋葬用の穴掘り作業が続く。冬は凍って穴を掘れないので、その前に用意しておいて、死んだ人はどんどん穴に埋められていった。「真実、自分もこうなるのだと感じていたのです」

一九五三年三月にスターリンが死去したことにより、翌五四年四月「恩赦」ということになるが、これも形ばかりのもので、今度はアクタスという地に行かされることになった。そこには炭鉱や煉瓦工場があつたけれども、哲郎さんには身分証明書がなく、かつ定期的に警察に出頭しなければならぬため、働くこともできず、食べることができない状態に陥る。ようやくにしてセメントを倉庫に運ぶ仕事が見つかった。この仕事はセメントの粉が飛んで口や目に入るので誰も嫌ってやりたがらないのだが、職のない彼は金がもらえるので、頑張って続けた。

実はセメント工場の方には日本兵が六人いたが、一九五六年に日本にダモイした。哲郎さんは民間人だから兵隊の名簿に入っていないので帰国は叶わず、どんなに悔しかったかしれなかった

としみじみ言う。

考えてみれば捕虜には罪名はないようだが、自分には重い罪名がある。こんなばかなことが許されるかと怒つてもどうしようもない歯痒さ、いらだたしさがあつた。

カザフはまだソ連に属する一共和国で、日本大使館もない時代であり、哲郎さんは、在モスクワ大使館に手紙を出したが届く様子は全くなかつた。「アヒコテツロウと申す日本人です。帰国を希望します」と何度書いたことか。

日本兵が帰国するのを見た後、絶望と厳しい労働のさなか、哲郎さんを励まし続けたのは、建築現場でセメントの製造に従事していたドイツ系の女性エカテリーナさんであつた。そして一九五六年暮れに結婚したことで、彼はどん底からはい上がり生きる力を与えられていった。夫婦はセメント工場で一緒に働き、彼はやがて溶接工になつて、一男一女も授かる。息子にはテルオ（輝男）、娘にはイリナ（入菜）と日本名をつけ、やっと落ち着いた生活を得たのであつた。

しかし妻は一九八三年十月、クレーンに吊り下げられていた鉄材が落下して、その下敷きになる事故で命を落とす。

その後、彼は電気溶接の仕事に移つて、子供を育てるが、妻の死後三年経つて再婚している。モルドバ系のエレーナさんである。



哲郎さんが協会の招待で初めて日本に一時帰国したのは、一九九四年七月のことだった。当時六十四歳。成田空港では日本語は口から全く出てこないで、「おう、おう」ともどかしそうに呼びかける様子が人目を引いた。

空港には、北海道石狩市の弟・藤井祐三さん、北海道保護課、協会役員のほか、慰霊の旅に行きカラガンダの墓地で哲郎さんと会い、弟の藤井さんに連絡をして帰国の手配を作った奈良県の野村利男さん（元捕虜、当時七十一歳）も顔を揃えていた。

約三十日間の滞在中には、首を長くして待っていた酒田市のお姉さん、北海道枝幸町の妹さんとも四十九年ぶりの再会を喜び合い、酒田市では市長さんたちの歓迎を受け、両親のお墓参りも済ませることができた。北海道では樺太本斗町時代の同級生にまで迎えられ、その席で彼は「蛍の光」「仰げば尊し」をはっきりした日本語で歌うことができたという。

哲郎さんは古い歌や軍歌をよく覚えている。百人一首も好きだったから、読み手のカラ札一枚



いつ来ても弟や仲間たちが迎えてくれるのが嬉しいと阿彦さん（右）左端は娘のイリナさん。  
（2009年11月、札幌の三浦さん宅前で）

「からからと、からおけ下げて、から買いに、けちなとうふ屋からもくれない」などと披露する。毎日毎日、昔使った日本語を思い出し、いささか新聞も読めるようになる。「自分は悪いことをして捕まったのではない。そのことを訴えたいのに、新聞は書いてくれないのが不満だ」などとつぶやくようになっていた。

海のない寒冷地のカザフスタンから北海道へ来て、漁業を営む弟さんと釣りをした嬉しさを、皺の深い顔をほころばせながら何度も何度も語る姿が印象的であった。

現在、哲郎さんは年金生活である。娘イリナさんはカラガンダの商店で働き、息子テルオさんは結婚してロシアのサンクトペテルブルグに住んでいたが、今は別れて父の元に戻り、炭鉱の機械修理に従事している。

自慢の息子は以前はカザフを代表する重量挙げの選手で、海外遠征もしばしばだった。すぐれた選手には国の援助も手厚かったことから、やや豊かな暮らしができたこともあったが、いまは経済的な困難が続き、人々は職に就くことも容易ではないという。



哲郎さんは、九九年一月に再度の一時帰国をしたときには、佐野伸壽氏宅、伊藤實さん宅にも招待されて泊まっており、日本への永住を勧められているが、決心がつきかねていた。二〇〇六年十月にエレーナ夫人と一時帰国した際には、四年前に永住した三浦正雄さん宅に伊藤實さんと

一緒に泊まっていたいろいろと相談した結果、哲郎さん夫妻も永住帰国を希望するようになって手続きに入った。しかしカザフに戻ってみると、ドイツに在住している夫人の子供たちは大反対。このため断念せざるを得なかったという経緯がある。

二〇〇九年十一月、哲郎さんはイリナさんを連れて一時帰国したが、すでにこの月に七十九歳。十七歳で連れ去られてから六十余年になる。親族も知人も減っていくが、ともにカザフで生き抜いてきた三浦さん、伊藤さん、支援し続ける佐野氏らがいる限り、彼は心を励まして日本人墓地を守りつつカザフスタン現地に留まり続けるのだろうか。

哲郎さんにお土産を上げたいと言うと、「すり鉢がほしい。じゃが芋をすって芋餅を作りたい」と言う。我々が少年時代に食べたものである。「すりこぎは自分で木を削って作るから要らない」と遠慮するところが彼らしいが、幸い札幌の商店に品物が揃っていた。今頃、彼はすり鉢とすりこぎで芋餅を作りながら、日本を想っていることであらう。



ともにカザフで苦労を重ねた伊藤實さんと祝杯。